

[シンポジウムⅡ]

スロヴァキアの民族混住地域における調査者の文脈と 文化人類学的調査の可能性

——ハンガリー系マイノリティ居住地域のフィールドワークより¹——

神原 ゆうこ

はじめに

スロヴァキアは、その人口の一割弱に上るハンガリー系の人々をマイノリティとして抱えており、その多くがハンガリー国境沿いの南部に居住している。彼／彼女らの多くは、チェコスロヴァキアとハンガリーの国境線が、現在とほぼ同じ位置に定められた1920年のトリアノン条約以前から、その地に住んでいたハンガリー系の人々の子孫である。現在、ハンガリー系とスロヴァキア系の人々との関係については、あまりよくないという印象を抱く人が多い。その理由の一つとして、スロヴァキア民族主義政党が政権与党の一員となるたびに提案されるマイノリティに不利な法案をめぐる、ハンガリー系政党所属の政治家とスロヴァキア民族主義政党の政治家の間で論争が何度も繰り返されてきたことが挙げられる²。また日常生活のレベルにおいても、互いに中傷しあうような動画の拡散 (Jablonický 2009) や、二言語標識への落書き (Orosz 2012) など、両者の不和を示す事象が存在していることが多くの人々に知られている。

しかしながら、スロヴァキア南部の民族混住地で民族間関係についてインタビューを行うと、人々は平和的な関係にあることを強調する。これまでに執筆された多くの民族誌的な先行研究も、基本的には、スロヴァキア系とハンガリー系の平和な共存を描いている (Frič 1993, Lukáčsová and Kusá 1995, Škovierová and Sigmudová 1981, Šoucová 1994, Torsello 2003)。スロヴァキア系にしろ、ハンガリー系にしろ、民族主義的な人々は、「政治家に扇動された一部の例外的な人々」であり、混住地の「普通の人々」は平和に共存しているというのが、この土地の人々の基本的な認識である (神原 2015, Kambara 2017a)。確かに、1990年に実施された質問紙調査の結果によると、ハンガリー系がほとんど居住していない地域のスロヴァキア系と比較して、ハンガリー系が多く住んでいる地域に住むスロヴァキア系やハンガリー系の人々は、両者の民族間関係を良好なものとしてみなす傾向が強い (Belica 1990: 50–51)。その点で量的調査の結果とインタビューで得られた見解は一致しているのであるが、これだけではなぜ対立が存在しているとみなされ、不仲のイメージの流布しているのか説明できない。むしろ、人々が関係を良好だと口を揃える裏に、何か意図があるかのようにすら見える。

筆者は2012年から南部スロヴァキアの主要都市でフィールドワークを行ってきた。それ以前はスロヴァキア系の多い地域でフィールドワークを行っていたので、調査開始当初はスロヴァキア語でインタビューを行わざるを得なかった。幸い、2016年から2017年にかけてハンガリーで在外研究の機会を得ることができ、ハンガリー語を集中的に学ぶことができたので、ハンガリー系コミュニティの参与観察なども徐々に可能になった。このように調査言語が増えたことにより、理解できる情報は格段に増えた。しかし、それだけでなくハンガリーに拠点を置いたことで、得られる情報の性格も変化した。インタビューや参与観察を主たる調査方法とする文化人類学において、調査者の特性によって得られる情報が変化することはやむをえないことであるが、多くの場合、それは別の調査者との比較を通じて明らかになるものである。本報告では、同じ調査者であっても置かれた文脈によって得られる情報が変容することを踏まえ、文化人類学的フィールドワークの可能性を検討したい。

1. 文化人類学的フィールドワークの現在

1.1. 現在の文化人類学的フィールドワークの特徴

文化人類学者が行うフィールドワークでよくイメージされるのが、発展途上国のコミュニティに住み込んで行う長期滞在型の調査である。しかし、現在の文化人類学者のフィールドは、必ずしも一つのコミュニティにこだわるものではなくなっている。たとえば、佐藤は現在の人類学的フィールドワークの特徴として、①先進国／発展途上国の区別を問わず、世界各地をフィールドとすること、②異国／自国を問わず、世界各地をフィールドとすること、③フィールドは、本来的に複数の文化や制度が併存しているものと考えていること、④ある特定の状況を生きる人々を調査対象とするが、それらの人々は必ずしも民族集団ではないこと、⑤個々人の生活に着目し、できる限り等身大の活動を記述すること、⑥個別の出来事であってもひろく人類という視点から考察する「人類学的センス」をもってフィールドワークを行うこと、という6点を挙げている（佐藤 2013: 63）。このようなフィールドの広がりに影響を与えたのは、1980年代以降に顕著となった「未開社会」を前提とした研究姿勢への批判や、本質主義的な「民族」概念への批判である。

フィールドワークという手法自体は、文化人類学に限らず、社会学、教育学、心理学、経営学、政治学、歴史学、言語学、地理学、生態学など、様々な分野で用いられている。自身が所属する社会を研究対象とすることが多い社会科学分野では、インタビュー方法の精緻化が目指されているが、文化人類学の場合、インタビューで得られた情報のみが重要であるとは限らず、現場の観察など、手法を複合的に組み合わせて分析を行うことが多い。なぜなら、文化人類学者は、たとえ国内をフィールドとしていても「他者」の文化を探求することを目的としており、「他者」との会話の前提と

なる基本的な認識を共有していないことに敏感であろうとするからである。このように、フィールドワークを通して、ホーリスティックな視点で「他者」の世界観について理解しようとする点は、文化人類学と他のディシプリンとの違いのひとつといえるだろう (Wilson and Donnan 2012: 12; 鏡味 2011、菅原 2006)。

1.2. 現地のフィールドワーカーと文化人類学

また、文化人類学は国ごとに独自の様態を取っていることが多く、中東欧の文化人類学は自文化を研究対象とする民俗学 (*Národopis / Néprajz*) の蓄積の上に成立してきた点で、日本の文化人類学とはやや異なる特徴を持つ。この地域をフィールドとする文化人類学の研究成果の多くは、現地出身者によるものであるが、2000年代くらいまで、外国人研究者と現地の研究者の研究関心の相違は顕著であった。外国人研究者はポスト社会主義期という社会主義時代の文化的影響が残る時代の生活に関心を抱きがちであったのに対し、現地の研究者は地域に残る文化的な儀礼や習慣の変容に関心を抱くことが多かった。

そもそもヨーロッパをフィールドとした人類学自体、ヨーロッパ出身の研究者による自文化の研究という傾向が強いことは否定できない。多くのヨーロッパ諸国は自国の農村コミュニティの研究に長年の蓄積を持つ一方で (Goddard et.al 1994)、現在は広く応用人類学的な研究を進めている。例えば、社会問題解決に役立つという点で、国内のマイノリティについての研究成果が期待されたり (Eriksen 2009, Okely 2015)、具体的なコンサルタント業務の可能性が期待されたりしている (Foblets 2015)。このような実践的な研究が現地の人類学者に期待される状況において、逆説的ではあるが、外国人の研究者こそ、問題の所在そのものを問い直すような文化研究が可能になっているといえるだろう (Kambara 2017b)。

スロヴァキアのハンガリー系マイノリティ居住地域についても、基本的には、スロヴァキアの研究者、ハンガリーの研究者に加えて、マイノリティ出身の研究者が研究に携わっていることが多い。ハンガリー系マイノリティはスロヴァキアの問題の一つであると同時に、ハンガリーにとっても在外同胞という点で関心を集めている。ハンガリー系マイノリティの現状を探求するオーソドックスな人類学的研究もおこなわれているものの、スロヴァキアの研究者は概して民族間関係に関心を持ち、ハンガリーの研究者はハンガリー文化の保持やハンガリーとの関係に関心を持つ傾向が強い。当事者であるハンガリー系マイノリティ出身の研究者については、マイノリティ言語の使用状況や教育に関する量的調査や、歴史研究については比較的充実した蓄積があるが、フィールドワークに基づいた研究はそれほど多くはない。フィールドワークに基づく研究として、現在の生活に残る伝統的な儀礼の研究や (Liszka 2003)、民族間結婚家庭出身者のアイデンティティの研究など (Árendás 2011) が挙げられるも

の、民族間関係の対立の核心部分を避けた問題設定がなされていることが多い³。これについては、当時者に近いほど、対立に関連する研究は実施が難しいという現実があることが容易に想像できる。

その点でアメリカの社会学者 Brubaker が大学院生とともにトランシルヴァニアの民族間関係について行ったフィールドワークの成果 (Brubaker et.al. 2006) は、この問題に挑戦的に取り組んだといえる。調査メンバーには、アメリカからの外国人研究者以外に、ハンガリーとルーマニアの出身の大学院生が含まれていた。このように、一つのフィールドを複数の研究者の視点で見るといったような調査は、フィールドのリアリティに限りなく近づくためには有効である。その一方で、話す言葉とフィールド拠点を交えて同じフィールドに2回アプローチすることで得られた情報の差もまた、調査者の依存する文脈の差を考えるうえで非常に興味深いものであった。本稿で注目しているのは、このような調査者の文脈であり、調査者の文脈の変化から窺える現地の状況を考察したい。

2. 南部スロヴァキアのハンガリー系マイノリティ

2.1. フィールドワーク①：スロヴァキア社会からのフィールドワーク

スロヴァキア国内であっても、ハンガリー系の児童数が十分な地域では、ハンガリー語で公的な初等教育、中等教育を受けることが可能である。また、学部は限られるとはいえ、ハンガリー語で高等教育を受けることも可能である。さらに、ハンガリー系住民の割合が一定以上の自治体では、二言語で地名を表記することや、役場でのハンガリー語使用が可能になるなど、マイノリティの権利はある程度保障されている。しかし、ハンガリー系の人口は年々減少しており、1991年には56万人で全人口の10%を超えていたハンガリー系も、2011年には46万人で人口の8.5%に過ぎないものとなっている。ハンガリー系の政治家は、この減少の理由のひとつとして、スロヴァキア系への同化が進行していることをしばしば挙げており、それゆえにハンガリー系マイノリティの文化的な権利の保護を重要視している。

2012年に、筆者がハンガリー系マイノリティの調査を始めたとき、ハンガリー語はほとんどわからない状態であった。ただし、それまでのスロヴァキア滞在期間中に出会ったハンガリー系の人々は、流暢にスロヴァキア語を話す人々ばかりであり、インタビュー調査が不可能だとは思えなかった。そこで、まずは首都ブラチスラヴァに拠点を置き、ハンガリー系が多く居住するスロヴァキア南部の都市のキーパーソンにインタビューを始めることにした。具体的には、ある程度の人口規模があるうえに、ハンガリー系住民の割合も高い Komárno と Dunajská Streda に注目し、ハンガリー系、スロヴァキア系を問わず、政治家やアソシエーション関係者、学校関係者などに、インタビューを申し込こんだ。加えて、スロヴァキアのハンガリー系マイ

ノリティの政治、文化、教育、NGO 活動などの分野のキーパーソンには地域を超えてインタビューを行った。結果として、Komárno と Dunajská Streda 以外に、Šamorín、Štúrovo、Kráľovský Chlmec、Rožňava、Košice、Bratislava の合計 8 つの南部の都市でインタビューを行うことになり、ハンガリー系の居住地域を幅広くカバーすることができた。スロヴァキア系の人々がしばしば「ハンガリー系はスロヴァキアで生まれたにもかかわらずスロヴァキア語をうまくしゃべれない」とハンガリー系に対して陰口をたたくのは裏腹に、キーパーソンへのスロヴァキア語でのインタビューは全く問題なく行うことができた。

冒頭で紹介したとおり、インタビューにおいて、南部の混住地域の人々が総じて強調するのは、人々の間には対立はなく、民族の対立は政治家が生み出したものという点であった。人々には、対立の一因とみなされがちなマイノリティ政治家でさえ、スロヴァキア系と対等なパートナーとなるために権利を守ると、「共生」を前面に出した語り口を共有していた（神原 2014、2015）。ここで表出するのは、民族間関係に不満を持つ人々を「一部の人々」と認識し、対立を日常から切り離すことで、共有される平和なコミュニティである。実際には、様々な不満やトラブルはあるのだが、それは近隣関係ではよくあること、嫁姑間ではよくあることであり、民族の問題ではないと、語り手自身が自らを納得させている側面もある。その点で、これらの語りは現実を反映したものというよりは、亀裂予防のための希望的な語りに近いものでもあった（神原 2015、Kambara 2017a）。

2.3. フィールドワーク②：ハンガリー社会からのフィールドワーク

スロヴァキア語で行ったここまでの調査における最大の課題は、ハンガリー系の人々の諸活動の参与観察があまり意味をなさないことであった。ハンガリー系とスロヴァキア系が両方いる場では、両方の言語が入り混じるが、ハンガリー系の人々のみ集まる場では人々はハンガリー語を話す、ということ以上の情報を得ようとすると、ハンガリー語の運用能力が必要であった。そこで、2016 年からは、ハンガリーでの 1 年間の在外研究の機会を生かし、ブダペストに拠点を置いて、ハンガリー語の習得と並行しながら調査を進めることにした。さらに、ハンガリーにおいて、スロヴァキアのハンガリー系の人々は、在外同胞問題以外に国境地域協力のパートナーとしても関心を集めていることに注目し、スロヴァキア・ハンガリー国境地域協力についての調査を加えることにした。国境地域協力の関係者は英語を流暢に話す人も多く、2016 年以降は、スロヴァキア語以外の調査言語として、英語とハンガリー語を使う機会が増えた。

スロヴァキアとハンガリーの国境地域協力において、スロヴァキアのカウンターパートはスロヴァキアのハンガリー系であることが多い。この言語障壁の低さが、

この地における国境地域交流のための自治体連合であるユーロリージョンやEGTC (European Grouping of Territorial Cooperation) の数の多さにつながっている (Svensson 2014)。これまでハンガリー系マイノリティのインタビュー調査を行ってきた際に、ハンガリーとの交流状況は尋ねてきたのだが、多くのハンガリー系が積極的にかかわっているというわけではなかった。しかしながら、ハンガリー側から国境地域協力をキーワードに同じ調査地にアプローチすると、ハンガリーと関係を持つスロヴァキアのハンガリー系の人々にばかり会うことになる。当たり前のことかもしれないが、それまでの調査では人々が (程度の差はあれ) 「一部の人々にすぎない」と語っていた、ハンガリー系としての意識をより強く語る人々に出会う機会が増え、スロヴァキア系との共生についてもやや言葉を濁す人々にも出会うようになった。ハンガリー政府は国外のハンガリー系のアソシエーションや学校等を支援しており、EGTC などとは別のレベルでの草の根交流も多数あり、ハンガリーと関係を持つ層は想像以上に広いことを認識せざるを得なかった。

2つの調査の大きな相違は、最初の調査では見えにくかったハンガリー語を使用する人々の凝集性とその社会空間を、後の調査で目の当たりにするようになった点である。誤解を恐れずにいえば、前半の調査では、一部にすぎなかったハンガリーと強くつながっている人々が、フィールドへの入り口をかえた後半では出会う人々の大半となったのである。テーマを設定して調査を行う以上、問題設定が変わればフィールドの見方も変わることは当然かもしれない。しかし、それは文化人類学が得意としてきたホーリスティックな視点とは矛盾している。つまり、同じ調査地に2つの異なる方法でアプローチした際に、最終的に近似した像を描くことができないのであれば、文化人類学の調査は方法として不十分な側面を残すのではないかという疑問に直面せざるをえない。

3. 2つの調査の差異とその可能性

文化人類学のフィールドワークがめざすホーリスティックさについて問い直すために、まずは2つの調査の差異をもう少し詳細に考えてみたい。最初の調査は、ブラチスラヴァで勉強した経験を持つ外国人研究者が、スロヴァキア語で行った調査であるのに対し、2016年以降の調査は、ブダペストに住んでいる外国人研究者がハンガリー語を学びつつ、スロヴァキア語や英語で行った調査である。したがって、インタビューを受ける相手は、最初の調査においては調査者がスロヴァキアの事情をある程度知っていると予測し、後の調査では、ハンガリーの事情もある程度知っているかと予測していたと考えられる。スロヴァキアにおいて、ハンガリー系マイノリティとスロヴァキア系の間でしばしば「事件」が起き、両者の関係は問題とみなされがちである。一方、ハンガリーにおいて、スロヴァキアのハンガリー系マイノリティは、スロヴァキア系

に民族のアイデンティティを圧迫されないよう、支援すべき同胞とみられがちである。このようなフィールドにおいて、言語は目の前の対話相手との意思疎通の手段であるだけでなく、相手がどのような情報を持っているかを推し量る手段でもある。調査の後半で、ハンガリー系マイノリティ社会のそれまで見えなかった部分に触れることができたのは、筆者がハンガリー語メディアの世界を知っているだろうと、調査対象者が認識したことの結果でもある。ただし、最初の調査がなければ、その存在が政治的であるがゆえに、言葉を選んで現状を語る混住地域の人々の意図を知らずに、ハンガリーとつながるハンガリー系の世界に触れていたことになる。その点で、混住地域の人々の世界を追うためには、両方の言葉でアプローチする意味はあったと考えられる。

では、民族混住地域は、全ての居住者の言語で調査しないと、ホーリスティックに理解できないのだろうか。この点については、現実的な調査可能性以外にも疑問が残る。というのも、民族混住地域の人々のなかには、第一言語や日常使う言語を一つに絞れない人々も多く⁴、どの言語が彼／彼女らの言語であるかということも単純ではないからである。また、スロヴァキア南部には、スロヴァキア語しか話せないスロヴァキア系も一定数いるが、そのような人々も当該社会の一員である。したがって、国境地域協力という地域振興のための手段をもつハンガリー系に対し、「ハンガリー系にはスロヴァキア系よりも様々なチャンスがある」という不満を語るスロヴァキア系の世界も併存している。また、スロヴァキアとハンガリーの国境地域協力も都市部を中心に、ハンガリー語でなく英語を共通言語とするスロヴァキア系とハンガリー系の協力のネットワークも出現しつつある (Kambara 2018)。最初から筆者がスロヴァキア語とハンガリー語の両方で調査できる状況で調査を進めていたら、民族混住地域のスロヴァキア語世界に気づけていたかどうかはわからない。バイリンガルの人々はスロヴァキア系と共存する空間もハンガリー系の人々との空間も、どちらも自分たちの生活世界であるが、そうでない人々も含めた民族混住地域の分断状況は、そもそもホーリスティックに把握することが難しい対象でもある。

このように、調査者の属性が変わることによって得られる情報が変わってしまうことそのものを、調査地の特性として考察することは、文化人類学的なフィールドワークの一つの可能性であるといえるだろう。近年のヨーロッパであれば、そもそも英語である程度のインタビューは可能であるし、現地の公用語でマイノリティにインタビューをすることも可能である。ただし、彼／彼女らが語ってくれないことや、実際の行動の意味、その集団が共有する社会認識をさらに把握しようとする、彼／彼女らの生活空間に踏み込まざるを得ない。言語はそのとき有効なツールとなる。ただし、その生活空間はかならずしも唯一ではないことに注意する必要がある。文化人類学の調査におけるホーリスティックさは、その社会ないしコミュニティの範囲がどこまでか含めて考察する際に役立つものである。

4. おわりに

フィールドによって多少の差はあるが、文化人類学において、調査対象者の第一言語で調査を行うのは基本だとみなされている。それは、本稿ですでに触れたように、言語化された情報を得ることだけが調査の目的ではないからである。それだけでなく、スロヴァキア南部のバイリンガルの人々にとって、言語は生活の手段であるだけでなく、それを使うことで自身の立場の表明する意味をも持つ。第一言語であるが、政治的な意味を背負ってしまうハンガリー語、外国語ではあるが仕事や生活に必要で、国家への帰属も示すスロヴァキア語（近年であればヨーロッパレベルの知識人であることの証明としての英語も）をそれぞれどのくらい使う場に関わっているかが、そのまま各人の生き方にもつながっている。その意味では、混住地域で共通語としてのスロヴァキア語をハンガリー系が使用するという自体、平和な共生の実践である。本研究の最初の調査においては、人々がスロヴァキア語でインタビューを承諾した時点で、その人は共生を肯定する生き方をしている可能性が高いものであったと考えられる。

本稿では、報告者の調査経験をもとに、文化人類学が、調査者が持つ文脈を生かしたうえで成立する学問であることを示してきた。したがって、異なる背景を持つ研究者による多層的な理解の蓄積は、現地のリアリティに近づく手段となる。とくに、当該社会がある程度分断されている場合、ひとりの調査者が（あるいは現地の居住者であっても）その社会をホーリスティックに理解することには限界がある。むしろ、そのようなフィールドの特性自体が記述の対象になるだろう。

その一方で、このような民族混住地をフィールドにした場合、民族や言語以外を研究テーマにしづらいという問題についても考えておく必要がある。たとえ、ほかのテーマを扱っていたとしても、これらの民族や言語の多様性を調査地の特殊性として言及しないままではいかに、その影響力も考慮する必要がある。とはいえ、民族や言語の差異を日常生活の一部として生活している人々にとって、それらは日々の深刻な問題とは限らない。混住性を特異なものとみなした時点で、民族誌は彼／彼女らのリアリティの記述であることを裏切ることになる。ただし、その当たり前のことが誤解されている現実があるからこそ、民族混住地の日常性についての記述は繊細である必要がある。

注

¹ 本稿は、日本スラヴ学研究会シンポジウム『中・東欧におけるフィールドワークから／を考える』（2018年6月30日、於東洋大学）での報告をもとにしている。なお、当日の

報告題目は「スロヴァキアの多文化地域における政治的文脈と文化人類学的調査の可能性：ハンガリー系マイノリティ居住地域のフィールドワークより」であったが、『スラヴ学論集』への掲載にあたってより適切と思われる題目に変更した。

- 2 たたとえば、国家語としてのスロヴァキア語の使用を強化するために、言語法制定（1995年）やその改訂（2009年）が提案され、議論を経たのち施行された。隣国のハンガリーが在外同胞に国籍を付与する法律を通過させたのに合わせて、二重国籍を禁止するための国籍法改訂（2010年）もハンガリー系マイノリティへの国籍取得を想定したものと理解され、議論を呼んだ。
- 3 例外として、スロヴァキア系とハンガリー系マイノリティの研究者が合同で行った調査がある（Botíková et.al. 1994）。この調査では、スロヴァキア系住民が急に増加したハンガリー系の町における住民の不満が報告されている。
- 4 たたとえば、今回調査した都市のうち、Komárno、Štúrovo、Rožňava、Košiceでは、2011年の国勢調査の際に、10%以上の人々が、民族帰属や第一言語について、選べないと回答するか、選んでいない（なお「その他」という項目は別に存在する）。

参考文献

- Árendás, Zsuzsanna. 2011. Intermediary positions in a multiethnic society: The phenomenon of ethnic hybridity in two south Slovak districts. In: Szarka László (ed.) *A Multiethnic Region in East-Central Europe: Studies in the History of Upper Hungary and Slovakia from the 1600s to the Present*, 434–454. New York: Columbia University Press.
- Belica, Cyril. et.al. 1990. *Aktuálne problémy Česko-slovenska*. Bratislava: Centrum pre výskum spoločenských problémov.
- Botíková, Marta, Eubomír Navrátil, László Öllös and László Végh 1994. Maďarsko-slovenské interetnické vzťahy v Šamoríne. *Slovenský národopis* 42(1): 73–94.
- Brubaker, Rogers, Margit Feischmidt, Jon Fox and Liana Grancea. 2006. *Nationalist Politics and Everyday Ethnicity in a Transylvania Town*. Princeton: Princeton University Press.
- Eriksen, Thomas Hylland. 2009. Norwegian anthropologists study minorities at home: Political and academic agendas. *Anthropology in Action* 16(2): 27–38.
- Foblets, Marie-Claire. 2015 Preparing future anthropologists for consultancy work (Rethinking Euro-anthropology: part two). *Social Anthropology* 23(4): 504–506.
- Frič, Pavol. 1993. Mýty a realita južného Slovenska, In: Réne Bilík (ed.) *Súčasnosť mýtov a mýty súčasnosti*, 50–54. Bratislava: Slovak Academic Press.
- Goddard, A. Victoria, Josep R. Llobera and Cris Shore 1994. *The Anthropology of Europe: Identity and Boundaries in Conflict*. Berg: Oxford
- Jablonický, Vilian. 2009. The danger of extremist videofilms and views on internet pages and

- computer games. In: Ján Duruľa (ed.) *Insight into Slovak-Magyar Relations*, 60–67. Bratislava: Slovak committee of Slavists.
- Liszka, József. 2003. *Národopis Mad'arov na Slovensku*. Komárno: Fórum inštitút pre výskum menším.
- Lukáčsová, Margaréta and Zuzana Kusá 1995. Interpretácia súčasného slovensko – maďarského súžitia a rodinná pamäť. *Sociológia* 27:373–384.
- 鏡味治也 . 2011. 「文化人類学とフィールドワーク」 鏡味治也、関根康正、橋本和也、森山工 (編) 『フィールドワーカーズ・ハンドブック』 1–10. 京都 : 世界思想社 .
- Kambara, Yuko. 2017a. Encountering in minority politics: Reconfiguring the other in transforming communities in southern Slovakia. In: Lajos Veronika, Povedák István and Régi Tamás (eds.) *The Anthropology of Encounters/ A Találkozások Antropológiája*, 176–194. Budapest: Magyar Kulturális Antropológiai Társaság.
- Kambara, Yuko. 2017b. A “stranger” researching narratives in southern Slovakia: Hungarian minority research by an anthropologist who is not “at home”. *Acta Universitatis Sapientiae: Social Analysis* 7: 5–21.
- Kambara, Yuko. 2018. Hungarian “minority” networks and borderland community under political influences of the Slovak-Hungarian cross-border cooperation. In: Nagayo Susumu (eds.) *Transboundary Symbiosis over the Danube 3: Re-thinking the meaning of Symbiosis—Past, Present and Future*, 93–112. Tokyo: Waseda University Press.
- 神原ゆうこ . 2014. 「共生のための政治言説と同化に対する抵抗の間の平穏 : スロヴァキアにおけるハンガリー系マイノリティ・エリートにとっての言語問題」 『基盤教育センター紀要』 18: 41–63.
- 神原ゆうこ . 2015. 「『共生』のポリシーが支える生活世界 : スロヴァキアの民族混住地域における言語ゲームを手がかりとして」 『年報人類学研究』 5: 45–71.
- Okely, Judith. 2015. Travellers (Forum: Rethinking Euro-Anthropology). *Social Anthropology* 23(3): 350–352.
- Orosz Őrs (ed.). 2012. *A Hely Nevei, a Nyelv Helyei. / Názvy miest, miesta názvov. / Name of Places, Places of Names. / Les noms du lieu, les lieux du nom*. Šamorín: Fórum Kisebbségkutató Intézet.
- 佐藤知久 . 2013. 『フィールドワーク 2.0: 現代世界をフィールドワーク (京都文教大学文化人類学ブックレット 8)』 東京 : 風響社 .
- 菅原和孝 (編) . 2006. 『フィールドワークへの挑戦』 京都 : 世界思想社 .
- Škovierová Zita and Marta Sigmundová. 1981. Sociálne vzťahy v etnicky zmiešanom dedinskom spoločenstve. In: Ján Botík and Margita Méryová (eds) *Teoretické a praktické problémy národopisného výskumu Maďarskej národnosti v Československu.*,

- 115–121. Bratislava: Veda.
- Šoucová Dana. 1994. Názory na problémy Slovákov a Maďarov žijúcich v národnostne zmiešaných oblastiach južného Slovenska vo výskume verejnej mienky. *Sociológia* 26: 496–500.
- Svensson, Sara. 2014. Forget the policy gap: Why local governments really to take part in cross-border cooperation initiatives in Europe. *Eurasian Geography and Economics* 54(4): 409–422.
- Torsello, Davide. 2003. *Trust, Property and Social Change in a Southern Slovakian Village*. Munster: Lit.
- Wilson, Thomas M. and Hastings Donnan. 2012. Borders and border studies. In: Thomas M. Wilson and Hastings Donnan (eds.) *A Companion to Border Studies*, 1–25. Oxford: Wiley-Blackwell.